



Contents

- P. 1-2 日韓国際公開シンポジウム開催報告
- P. 2-3 「佐賀地域の地質」技術研修会の共催
- P. 3 中学生訪問の受け入れ
- P. 4 有明海の魅力を探ろう
- P. 4 「海のサイエンスカフェ」開催
- P. 5 佐賀大学の授業を受けてみよう
- P. 5 研究活動スタート支援
- P. 5 スタッフ着任のあいさつ
- P. 6 スタッフ離任のあいさつ

日韓国際シンポジウム開催 「緊急シンポジウム－諫早開門問題，韓国の例に学ぶ－」

「緊急シンポジウム－諫早開門問題，韓国の例に学ぶ－」を2011年8月2日に福岡市のももちパレスで開催しました。シンポジウム前半では、センターの速水准教授，ソウル市立大学の金敬源博士，Ecocean社の朴永哲博士，江原大学の朴泰炫教授，東北大学の佐藤慎一博士から韓国における干潟域の開発と環境問題等について話題提供されました（次頁参照）。続いて，話題提供者に佐賀大学農学部の李應喆講師を加えて，韓国と日本の事例の共通性と違い，先行した韓国の事例の反省点などについてパネルディスカッションを行いました。参加者は75名（ちょうどホールの収容人数の半分）。平日の日中という時間帯もあってか大学・行政・企業からの参加者が中心で，一般市民の参加はあまり伸びませんでした。佐賀で開催した時とは違う顔ぶれも多く，遠方からの参加者もあり，あえて福岡で行った意味はあったと思っています。シンポジウム開催と同時に，会場前のホールで，中尾勘悟さん（写真家）による有明海・韓国干潟の写真展と，有明海の環境に関するパネル展示を行いました。

8月3日には場所を佐賀大学に移し，ワークショップ「干潟域大規模干拓・開門の環境影響に関する研究を」を行いました。公開シンポジウムでは話題にしにくい技術的な問題に関する議論を含めて，有明海・諫早湾問題の現状を韓国研究者に伝え，開門について議論することを目的として，センターから3名，韓国側から3名の発表があり，10時から18時まで，途中休憩を入れながら，十分な時間をかけた討論を行いました。翌8月4日には，海上から有明海を，上陸して諫早湾干拓地の現地視察を行いました。今回の一連の行事は，今後，日韓で干潟浅海域について共同研究を進める上で有意義なものであったと考えています。なお，本シンポジウムの要旨は，センターHPにてご覧いただけます（<http://www.ilt.saga-u.ac.jp/index.html>）。





日韓国際シンポジウムの様子



技術研修会の様子

<プログラム>

13:00-13:05 主催者あいさつ

13:05-13:45 背景と趣旨説明 速水 祐一 (佐賀大学)

第1部 話題提供 (座長: 片野俊也 (佐賀大学))

13:45-14:25 韓国の干潟の干拓と保全活動, そして未来
金 敬源 (ソウル市立大学)

14:25-15:05 始華湖におけるモニタリングと環境変化について -浮遊生物を中心に-
朴 永哲 (Ecocean)

15:05-15:10 休憩

15:10-15:50 締切・開門による生態系変化をどうモニタリングすべきか?
佐藤 慎一 (東北大学)

15:50-16:30 韓国の漁業法と環境影響評価
朴 泰炫 (江原大学)

第2部 パネルディスカッション

16:35-17:30 諫早開門調査をどう見ていくか? -日韓の比較から見えてくるもの-
座 長: 速水 祐一
パネリスト: 金 敬源・朴 永哲・朴 泰炫・佐藤 慎一・李 應喆

平成23年度 第2回「佐賀地域の地質」技術研修会の共催

筆者の属する低平地研究会地盤専門部会では、NPO法人技術交流フォーラムら関係諸機関との間のご共催を始め、(財)佐賀県土木建築技術協会ら関係諸機関のご後援のもと、去る平成23年7月28日(木)～29日(金)の2日間にわたり、「佐賀地域の地質」技術研修会を共催しました。両日を併せ、70名のご参加をいただきました。

同研修会は昨年度に開幕し、今年度で2回目を迎えます。昨年度を皮切りに、今後5年間は継続開催しようとの趣旨で取り組んでいます。(独)産業技術総合研究所より発行の著書「佐賀地域の地質」をベースに、研修会当日の前半は講習会、後半はオールコアや火山灰の実物を用いた実技指導からなる内容です。実技指導を組み入れていることから、1回あたりの参加者は多くても40名の限度を余儀なくされてしまいます。昨年度の反省を踏まえ、また事前の調整段階で今年度も多数の参加者を見込める状況が把握できたため、同内容を2日間かけて実施することにしました。

研修会では、九州大学大学院理学研究院・下山正一博士を招へいしてご講演・ご指導いただきました。今年度は下山先生のもとで卒業研究に取り組む4年生の山田圭太郎君のアシストもいただけることとなり、昨年度よりはスムーズに研修会を進めることができたと思います。詳しくは恒例のアンケート調査結果を待ち、昨年度と同様に低平地研究にご質疑への応答も踏まえて詳報させていただきます。と考えています。



オールコアの半割観察に基づく柱状図精度の向上は、地盤工学あるいは地盤環境学に関する知見の根幹を支えるものとの信念で同観察の姿勢を貫いています。有明粘土層、蓮池層上・下部、などの地層名称は、単に名前を表すのみならず、地層の堆積当時の環境復元の意味合いまで含みます。有明粘土層と区分される地層の堆積当時の環境は、今日の干潟を含む有明海の海底地盤です。蓮池層上・下部の場合は、今日の川べりに堆積している“ガタ土”の環境がその起源です。

有明海沿岸低平地域においては、次に、現在の地盤環境の指標である酸化還元電位（ORP）、pH、塩分等が測定され、堆積当時の環境の復元結果との間で比較されることとなります。両環境の間にギャップが認められる場合はこの経緯のメカニズムについて検討し、結果として今日の地盤工学的性質あるいは地盤環境学的性質にどのように影響を及ぼしているかを見極め、地盤工学や地盤環境学において最も肝要となる将来予測の精度向上に資したいとの考え方です。

（日野剛徳）

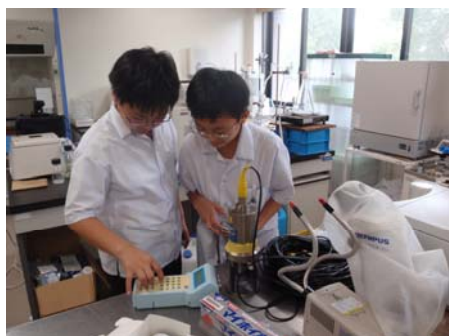
中学生訪問の受け入れ

去る8月1日、久留米大学附設中学校1年生の島内柊人君、今泉利崇君が、当センターを訪れました。興味のあるテーマについて地元の大学、研究機関にて研究の現場を見学するという中学校の夏休みの課題に対して、島内君と今泉君は、有明海の生き物、水質の研究に触れたい、とのことから今回の訪問に至りました。

当日は、1時間半ほど、有明海での赤潮の現状、赤潮発達過程について、対話形式の授業を行いました。その後、研究室にて、当センターが実施している自動観測タワーでのモニタリングシステムや観測機器を紹介するとともに、培養している赤潮プランクトンの顕微鏡観察なども行ってもらいました。

赤潮について、ほとんど知識がなかったとのことでしたので、これからは、赤潮問題などにも関心をもって、海に接してくれることを期待しています。

（片野俊也）



観測機器の紹介



赤潮プランクトンの観察



田古里川河口の干潟

有明海の魅力を探ろう

「有明海」といえば、「諫早湾干拓事業」, 「貧酸素水塊の形成」, 「赤潮の発生」といった、いわば“問題”を取り上げることが多いのが現状です。しかし、有明海の今後を考えるのであれば、現状での魅力を探すことも重要です。探してみれば数々あるとは思いますが、それらのなかのひとつは「田古里川流域」ではないでしょうか。

田古里川は、佐賀県藤津郡太良町を流れる川で、佐賀県の二級水系に指定されている川です。河口には干潟が広がり、過去に行われた調査報告を検索してみると、サキグロタマツメタ、ハイガイ、イチョウシラトリ、ムツハアリアケガニのような珍し生物が棲息しているとのことでした（詳細は環境省自然環境局「インターネット自然研究所」ホームページ等をご覧ください）。

有明海研究プロジェクトではこれまで田古里川流域を調査したことがありませんでした。そこで先日、速水祐一准教授と田古里川河口から上流に向けて歩いて見聞してきました。干潟もそれに注ぎ込む川も自然豊富で、机上で計画していたよりも川を遡上しながらの調査にかなりの時間がかかっており、今後も継続して行う予定にしています。

佐賀大学低平地沿岸海域研究センターおよび有明海研究プロジェクトでは、田古里川のような「有明海地域の魅力」をこれからも調査・研究してまいります。もし「このような場所があるよ」との情報をお持ちでしたら、是非ご一報ください。

(藤井直紀)

「海のサイエンスカフェ」開催

2011年9月26日から30日に九州大学筑紫キャンパスにおいて2011年度日本海洋学会秋季大会が開催されます。この大会に合わせて、「第8回海のサイエンスカフェ」を開催します。今回のサイエンスカフェは、当センター藤井直紀特任助教が「海月の海から」と題し、有明海の食用クラゲの話などの話題提供を行う予定となっています。皆様のご参加をお待ちしています。

タイトル：海月（クラゲ）の海から一上を向いて泳ごう。－
 話題提供：藤井直紀（佐賀大学低平地沿岸海域研究センター）
 進行：市川 洋（独立行政法人海洋研究開発機構）
 日時：平成23年10月1日（土曜日） 11時－13時
 場所：TAOカフェ（福岡市中央区清川1-8-8-3F）
 参加費：無料
 定員：定員：25名程度（多数の場合は先着順）
 事前申込：不要
 主催：日本海洋学会教育問題研究会
 共催：地球環境アジアワークショップ「サイエンスカフェ事務局」
 協力：九州大学大学院工学研究院環境流体力学研究室
 後援：佐賀大学低平地沿岸海域研究センター

「佐賀大学の授業を受けてみよう」で授業を開講

昨年度に引き続き、本年も「佐賀大学の授業を受けてみよう」で授業を開講します。これは、佐賀大学附属中学校の生徒さんを対象として文化教育学部が主体となって行っているものです。佐賀大学の講義や実習によって、生徒さんに学問の世界に興味を持ってもらうとともに、多様な研究分野に触れることで将来の進路を考えるきっかけとしてもらうことを狙っています。当センターからは、10月29日に、以下の2つの講義を行います。

- 身近な海を調査する-有明海の環境問題との関係から- 速水祐一・藤井直紀
- 本当に怖い？プランクトンの話 片野俊也

科学研究費補助金

研究活動スタート支援による研究が採択されました

研究活動スタート支援とは、本年度の科学研究費助成金の応募資格が無く、研究機関に採用されたばかりの研究者を対象としたものです。本種目に4月から研究員として着任した三島悠一郎氏の研究が新たに採択されました。

三島氏と荒木宏之教授は共同で「HT/Zeリン回収法」を考案し、これまでに基礎研究を行ってきました。また、現在は本法の実用化をねらい、地元の企業と共に研究を行っており、本採択課題で実用化に向けた実証的な検討を進めます。

研究課題の概要は以下の通りです。

研究代表者：三島悠一郎（研究機関研究員）

種 目：研究活動スタート支援

課 題 名：HT/Zeリン回収法の実用化に向けた実証的検討

研 究 期 間：平成23年度（直接経費総額 150万円）

スタッフの着任

平成23年7月25日より、研究機関研究員として木梨真知子氏が着任しました。以下、木梨氏からのコメントです。

木梨真知子 研究機関研究員

平成23年7月25日付で低平地沿岸海域研究センターの研究機関研究員として着任いたしました。茨城大学理工学研究科において都市計画を学び、平成22年に博士の学位を取得した後、同大学の研究員として勤務しておりました。これまで、研究の柱として「都市の安全・安心」を位置づけ、防犯環境設計に基づく都市構造の解析、住民活動が安全性向上に及ぼす影響、道路空間デザインに関する研究、集約型都市の実現に向けた循環型住環境システムの検討等を行なってまいりました。以上の経験のもと、今後は佐賀の特殊な立地特性と自然環境を生かした安全・安心社会の構築を目標として、さらに研究の幅を広げていければと考えています。まだ不勉強な点が多く御迷惑をお掛けすることも多々あることと存じますが、周囲の方々と協力して全力で取り組んでまいりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。



木梨真知子 研究機関研究員

スタッフの離任

平成23年4月31日に永家忠司氏が離任いたしました。以下、永家氏からのコメントです。

永家忠司 研究機関研究員

4月31日をもって、センターを離任しました永家です。本来であれば前号のニューズレターで離任の挨拶をするべきでしたが、遅れてしまい皆様方にご迷惑をお掛けして申し訳ありませんでした。また、このような挨拶の機会を与えて頂いたことに感謝しております。

平成20年3年に佐賀大学 外尾一則先生のもとで学位を取得し、同年6月に低平地研究センターに、平成22年4月からは低平地沿岸海域研究センターのセンター講師として勤務し、約3年に亘り多くの方々にお世話になりました。現在は佐賀大学大学院工学系研究科の産学官連携研究員として、来年3月まで佐賀市における公共交通利用推進事業に係る調査、研究を行っています。

振り返るとセンターの一員と着任して以来、センターのスタッフを初め、様々な方から多くのことを経験し、学ばせて頂きました。特に一年目は市民フォーラムの事務局長を担当し、失敗したことも少なからずありましたが無事成功に終わり、大きな自信となりました。そのほか、ISLTなどほかでは経験できないような活動に関わり、様々な方にお会いできたことに感謝いたします。

低平地沿岸海域研究センターの益々のご発展とスタッフの皆さまのご活躍を祈念いたします。そして今後ともご指導のほど、宜しくお願い申し上げます。



永家忠司 研究機関研究員



編集後記

例年よりも長い夏が終わりを告げようとしています。今年の夏は、台風の影響が多く、防災への関心がより一層高まったように感じます。これからも、防災と環境を両立できる社会を目指して研究を進めたいと思います。

編集担当：片野，手塚

発行・編集

佐賀大学低平地沿岸海域研究センター
〒840-8502 佐賀市本庄町1番地
TEL 0952-28-8582 0952-28-8846
FAX 0952-28-8189 0952-28-8846
ホームページ <http://ilt.saga-u.ac.jp>

(平成23年9月30日発行)